かなやようすい

金屋用水

金屋用水は旭川へ流れ込む余川から、久世町台金屋の田んぼや畑まで用水を運ぶための重要な用水路です。

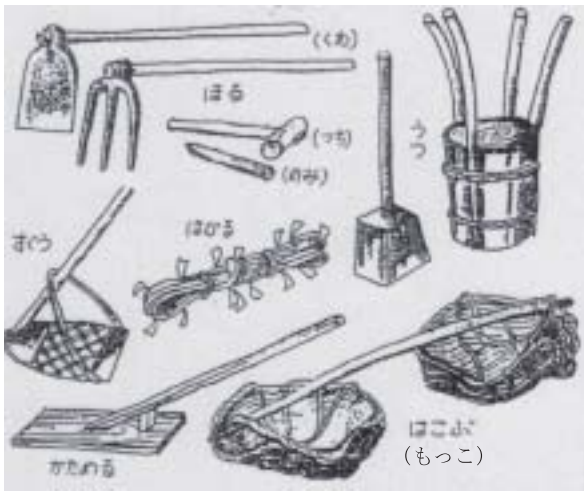
金屋用水の建設

金屋用水によりうるおった田んぼや畑

久世町台金屋では稲作を始めてから千数百年の間、水に大変不自由していました。それというのも、台金屋の土地は小高い丘の上なので、これといった谷水がないからです。

それでも村人たちは、雨水をたよりに、田んぼや畑を耕していました。しかし、日照りが続くと田んぼも畑もかわききってしまい、作物はかれてしまいました。

このため、明治３年に余川から水を引く用水路工事を始めました。今とちがって機械の全くない時代のことです。道具といえば、のみやつるはし、くわなどしかありません。高さを測る機械もないため、村人たちは夜になって、ちょうちんをともし、その明かりを目印にして、水が流れるように水路の位置を決めていきました。



むかしの道具

くわやつるはしで木の根や土をほり、もっこにのせて運んだり、大きな岩には、のみとつちを使って「トンネル」をほっていきました。谷の上をわたす時は、木の板で大きな「かけひ」(注)を作ったりもしました。

(注) かけひ
谷などの障害物の上を渡るために橋のような構造をした水路のこと。

このように、工事はすべて人の力がたよりでしたので１日にわずかしか水路を造ることができませんでした。

高台を潤す命の水

１年後、苦労の末、用水路が完成しました。長さは９５２４ｍにもなります。用水路の工事費は、銀札百貫文でした。今のお金にすると１億数百万円もの大金になります。用水路の完成によって、新しく田んぼが造られ以前からの田んぼもふくめて、台金屋のおよそ３０haの田んぼが、日照りの被害を受けることが無くなり、村人はいっそう農業に力を入れるようになりました。

金屋用水路は、１００年を超える長い年月の中で、あちらこちらがこわれることがありましたが、村人たちが協力して直してきたので、現在も田んぼに水が運ばれているのです。

引用文献

「わたしたちの久世町」
久世町教育委員会副読本編集部会編

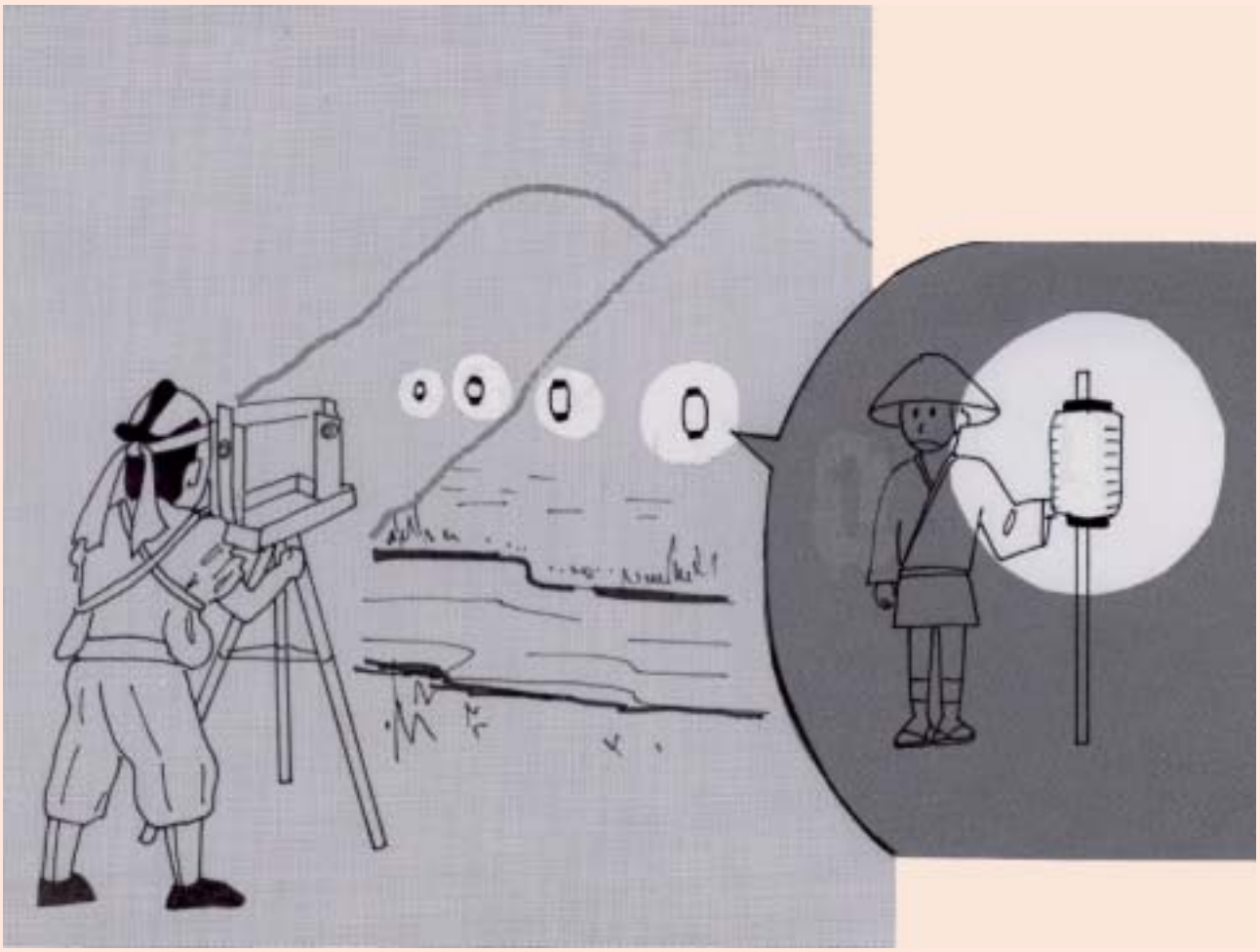
豆知識

昔の測量（水を流すための工夫）

水を流すためには、水路はでこぼこではなく、なだらかでなくてはなりません。もし低い所ができてしまうと、そこから水があふれて途中で流れ落ちてしまいます。反対に高いところができたら、そこで水が止まって流れなくなってしまいます。

このため、昔の人は山の中を通す水路を造ろうと考えた場所に、夜、明かりを灯した「ちょうちん」を持って並びました。それを反対の山から眺めながら、高い所は「ちょうちん」が下がる場所へ、低い所は「ちょうちん」が上がる場所へ移動するよう指示し、「ちょうちん」が一直線に並ぶまで繰り返しました。

このようにして、一直線になった場所に水路を造ったので、あふれたり止まったりすることなく水を流すことが出来たのです。



昔の測量のイメージ図